カナブン，シロテンハナムグリ，シラホシハナムグリ，ハナムグリが大発生している．ハナムグリは春から初夏にかけて多く，その他の 4 種は盛夏にかけて，きわめて多くの個体が見られる．リュウキュウツヤハナムグリは明らかな国内移入種だが，そんなことをいうとすべての種が在来ではなく，外来種だということに気づかされる．

高桑さんはその面白味をいち早く察知して調査に乗り出されたのだと思う．移入生物研究の第一人者であった高桑さんの面目躍如である．この興味深い調査の中途で斃れられたことは，かえすがえすも残念でならない．高桑さんが亡くなったことで，我々調査チームは大変意気消沈したが，故人の遺志を引き継ぐことで，高桑さんのこれまでの熱意に報いたいと考えている．筆者はこれまでに何度か野鳥公園を訪れて，携帯用のライトトラップやバナナトラップによる採集調査を実施しているが，成果は必ずしも上がっておらず，お役に立てているかどうかはわからない．しかし全体としては，極めて興味深い成果が続々と集まってきているところなので，それがとりまとめられて，高桑さんの仕事に脚光が当たることを期待したい．

3 年前の偶然の邂逅の時の写真をここに掲げて，高桑さんを偲ぶよすがとしたい．天国の高桑さん！本当に有り難うございました！

（国立科学博物館動物研究部）

追憶・高桑さん

平山洋人

高校一年の春のこと，その少し前からチョウだけでは飽き足らずオサムシにも興味を抱き始めた私は，何かのきっかけで知った京浜昆虫同好会の機関紙 INSECT MAGAZINE の No.76「オサムシ特集号」がどうしても欲しくなり，当時できてまだ日の浅い月刊むし社 (現 むし社) に，「会員ではないのだが何とか入手できないだろうか？」という主旨の電話をかけた．勿論私は「購入する方法はないか？」というつもりだったのだが，電話に出られた方は「そうですねぇ，もしかしたらうちにもまだあるかも知れませんので，何なら来てみませんか.」との返事 (考えてみれば，これはなかなかにいい加減な対応である．あるかどうか確認していないのに,「来い」というのだから) だったので，電話を切るや高校前のバス停から早速中野行のバスに飛び乗った．

地図と住所を見比べながら探し当てた「月刊むし社」は，予想に反してオンボロ・アパートの 1 階の 1 室に過ぎなかった．おそるおそる戸を叩くと細身で長髪の大学生ぐらいの人が出てきたので，「先ほどお電話した平山という者ですが …」と告げるとその方は，「あぁ，オサ特の件の人ね」というと奥で仕事をしていた方 (今にして思えば小岩屋敏氏) に向かって「お〜い，お前まだいくらか持ってるだろ．1 冊よこせ！」とか声をかけて，多少汚れてはいるが初めて実物を見る「オサ特」を手渡してくれた．「おいくらでしょうか？」と尋ねるとその方は「あぁ，汚れてるから別にいいよ．持っていきなさい」．恐縮しながら挨拶もそこそこに失礼して一目散に帰宅した私は，翌日の明け方まで一気に「オサ特」を読みふけった．これが高桑さんとの初対面であった (この「オサ特」は，製本が悪かったので壊れる度にボンドで貼り付け，ガビガビで元の 1.5 倍くらいの厚さになった背表紙で，今も我が家の書棚に鎮座している).

翌年から藤田宏氏の誘いで木曜サロンへも顔を出し始め，高桑さんにもいろいろお話を聞くようになった．この年の夏休み，当時軽井沢にあった高校の寮をねじろに生物部の合宿と称して周辺を遊び回っていた際，寮の裏の山で葉から葉へ飛び伝っていた涙滴型の妙な甲虫を採集した．帰京後サロンへ持っていくと，高桑さん曰く「オオシラホシハナノミだ！本州 3 頭目！」．これが私の「ELYTRA」初投稿となった．生まれつき暑い所が嫌いで，多くの虫屋が憧れる離島や海外へも 1 回ずつしか行ったことがない (島は三宅島，海外は高桑さんたちと行った中国雲南省の調査団) 私だが，不思議とハナノミの珍品には縁があるようで，ある夏アカジマトラカミキリ採集に出かけた松本で採ってきた尾節板の太い不格好なハナノミは，高桑さんにあげたら本州 2 頭目，全国でも 3,4 頭目だかのヤクハナノミになった (この個体が保育社の「原色日本甲虫図鑑 (III)」の掲載個体である). オオシラホシハナノミも，その後も 2 頭ほど採って差し上げた．

1984 年刊行の講談社「日本産カミキリ大図鑑」の製作には私もお手伝いさせていただき，おかげで当時の日本産カミキリ全ての標本をビノキュラーで観察する機会を得られたのは自身非常に貴

重な経験になったが，それで燃え尽きた訳でもないだろうが，ある頃から高桑さんは，「今後はハナノミとコブヤハズカミキリ類だけにする」といって，ライフワークを絞り込んで採集活動を行なわれるようになった．コブヤハズ・サミットなる調査・研究会 (実際は飲み会) を立ち上げ，そこの仲間を中心とした交流や自らの採集でデータを集積し，日本のコブヤハズの集大成本を目指していた．

高桑さんを知る方なら誰もが解るだろうが，特に飲んでいるときの彼は,「いい↗加減」であり,「いい↘加減」(この二つを文章上で区別することは難しい．要するに前者は「適当, デタラメ」後者は「中庸，程よい加減」ということ) で，基本的に楽観主義者なので，前者の彼に被害を被る場合も，特に私のようなどちらかといえばネガティブ思考の人間はままあったように思う．反面後者の彼が，癖っ気の強い虫屋集団を程よいバランス感でまとめてきた功績も極めて大きい．いずれにせよ，今後彼のような，時代を象徴するタイプの虫屋が新たに出て来るとは思えないのは，寂しい限りである．

今，これを書いている私の背後に 8 箱ほどのドイツ箱が積んである．多くの方がご承知のように，あと半年いや 3 ヶ月あれば完成できたであろう「コブヤハズ図説」の，8,9 割方出来上がったプレート標本と原稿を残して高桑さんは逝ってしまった．その無念さがどれほどであろうかは，身に突き刺さるように察せられる．せめて残った周囲の者の手で何としても完成に持っていかねばならないので，とりあえずプレート標本のデータ打ち込みは私が引き受けてきた．この作業は既に配列はされている標本を，しかし 1 頭々々ラベルを見てなるべく同様のレベル, 表記になるようデータを読みとっていくのだが，始めてみて分かったのだが高桑さんご自身の採集品のラベルは「いい加減」どころではなく，実は非常に詳細，緻密に記されている．周知のようにコブヤハズ類は種内の地域変異ないしは種間の接触前線での雑交や移行？の実態が経年変化をも含め極めて複雑なので，ラベルは詳しいに越したことはないのだが，ここまで細かくされると本人以外には解読不能というか，どの辺りで均一化するかの判断は，なかなか難しいものがある．正直やっかいなものを引き受けてしまったとチラリと思いながらも，毎日少しずつながらも黙々と作業を続けている．今，私が天国に伝えられるメッセージはおそらくこれしかないのだから・・・・・

（東京都府中市）

高桑正敏（タカクワ）を偲ぶ

槇原　寛

タカクワと，いつも呼び捨てにしていた．彼も私のことをマキハラさんと呼んでくれた．だけど，彼も私と同じ 1947 年生まれ．私が早生まれ，彼が遅生まれで学年が私の方が一つ上だったということで．

会って話をするのは常に酒の席．虫屋仲間も不思議に思われるかもしれないが，タカクワとは一緒に採集をしたことがない．採集地でもほとんど会ってはいない．これは，彼は関東の人間で人付き合いがよく，私は九州出身の田舎者で採集も常に一人でやっていたからである．

タカクワは好き嫌いのはっきりした人間だと思っている．彼と本当に親しくなれたのは 1981 年私が九州大学から，つくばの林業試験場（現森林総合研究所）に来て以降である．彼と故草間慶一さんが共同でカミキリ大図鑑を編纂していた時，ある飲み会で，私にアラゲケシカミキリ属 *Exocentrus* の部分の草稿を見せてくれた．この属は，本土では種類が少ないが，南西諸島では多い．私は鹿児島に長く住み，地の利を活かして，南西諸島ほぼ全域の種を集めていたし，私としては珍しく，全形図と雄交尾器の図を描いていたので，概要を把握していた．それで，その草稿はかなり間違っていると指摘した．それで大図鑑でこの部分だけやるはめになったのである．その後，彼から徳之島の材から羽化したアラゲケシカミキリ属のカミキリ 2 個体を受け取り，私の採集品と併せて，リュウキュウクモガタケシカミキリ *Exocentrus takakuwai* を記載した．多分，これで彼が私のことを認めてくれ，親しくもしてくれたのだと理解している．

タカクワの結婚式披露宴の席で，私を含む何をするか，何を言うか分からない悪童ばかりが中央の席に隔離された．スピーチの前のキャンドルサービスで回ってくる前に，私がよくやるのだが，ローソクの芯の部分にハシで穴をあけ，そこにビールを流し込んでいた．彼は順に席を回り，私どもの席に来て,「有難うございます」と言い，ローソクに点灯した．案の定，ローソクに火は点くがすぐに消える．消えるとすぐに「タカクワ消えたよ」